

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	シュタイナー教育の基盤にある自己認識の理論
Author(s)	衛藤, 吉則
Citation	HABITUS , 28 : 17 - 34
Issue Date	2024-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/55066
URL	https://doi.org/10.15027/55066
Right	
Relation	



シュタイナー教育の基盤にある自己認識の理論

衛 藤 吉 則

(広島大学大学院人間社会科学研究科・教授)

はじめに——「汝自身を知れ」の哲学

汝自身を知れ (γνώθι σεαυτόν : gnothi seauton)。

この言葉は、周知のように、古代ギリシアの賢者たちによってデルフォイの神殿に奉納された箴言の一つをさす。この言葉が含む重要な意義について、古代以来、様々な思想家が言葉を残している（以下、下線部筆者）。

ソクラテス（紀元前470年頃～紀元前399年）

私は、あのデルポイの神殿の銘文が命じている「汝自身を知れ」ということがいまだにできないでいる。それならば、この肝心の事柄についてまだ無知でありながら、自分に関係のないさまざまなことについて考えをめぐらすのは笑止千万ではないだろうか。だから、私は、そうしたことにかかずらうことをきっぱりとやめ、……私自身に対して考察を向けるのだ。

(プラトン著、藤沢令夫訳参照『パイドロス』岩波文庫、1967年、16頁)

プロティノス（205年頃～270年）

善き魂のもつ美しさがどのようなものであるかを、君はどのようにすれば見ることができなのか。まず、君自身にもどり、（君自身を）観よ。……君自身に付着しているような別の混じりものは君の内になにひとつとしてなく、君自身のすべてがたまことの光のみとなって……清らかな君が君自身と交わった時……その時こそ、君は心眼そのものとなって自信に満ちあふれていることだろう。……だから全力を

集中して観るがよい。大いなる美を観るのは、この眼だけなのだから。

(プロティノス著、水地宗明・田之頭安彦訳参照『プロティノス全集』第1巻
(Enneades, I.6)、中央公論社、1986年、296-297頁)

以上挙げた古代哲学の言葉からは、共通して、「ものごとの本質を知ろうと思うならば、まず、自分自身の心に目を向け、観、考えなさい」、というメッセージを受け取ることができる。認識(思考)における問題は、往々にして、私たち個々人がもつ「混じり気のあるまなざし」にある。そのため、そこを抛り所にして見、考えるのではなく、内奥にある「色づけされる前」の「虚(空・無)」に身を置き、心の目で観ることが勧められる。先の言葉はともに、そうしたエゴやとらわれのない「清らかなまなざし」でものを「観る」ことこそが本質認識に向けた唯一のアプローチであると、伝えるのである。

本論文で取り上げるドイツの思想家ルドルフ・シュタイナーもまた、この「汝自身を知れ」の哲学原理を支持し、自己自身の内側に意識を向け、あらゆる偏見を排除した純粋な思考を通して真実在との〈呼応〉体験が可能となると考え、その営みを自らの教育学の理論と実践の中核に位置づけている。具体的には、以下の章で、シュタイナー教育の基盤にあるそうした自己認識論の内実を構造的に明らかにしていく。

シュタイナーによる自己認識の理論

シュタイナーが自らの教育思想の根幹に置く自己認識論を、私たちが理解するためには、彼が当時、その克服をめざしたカント的認識論の構造と問題点を把握する必要がある。以下では、まず、シュタイナーが捉えるカント的認識論の射程と問題構造を明らかにした上で、つぎに、シュタイナーが共感を示すフォルケルト (Johannes Volkelt : 1848~1930) の認識論やJ.G.フィヒテ

(Johann Gottlieb Fichte : 1762～ 1814) の知識学との共感点ならびに批判点を紹介し、その作業を通して、シュタイナー自身によるカント的認識論克服の図式と、その核となる自己認識論の構造を描き出してみたい。以下、本稿では主としてシュタイナーの認識論著作 *Wahrheit und Wissenschaft. Vorspiel einer "Philosophie der Freiheit"*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, 1892 (『真理と科学—『自由の哲学』の序曲』) を利用するが、その際、引用箇所を (Steiner, 1892, 引用頁) のように文の後に付すこととする。

1. カント哲学における認識の射程と構造

「今日の哲学は不健全なカント信仰によって病んでいる」 (Steiner, 1892, S.9)。この言葉は、シュタイナーの『真理と科学』の冒頭で述べられている。つづいて彼は、「私たちがこのカント思想との明らかな対立のうちへ身を置くとき、はじめて、真に満足できる世界観や人生観の基礎を築き得る」 (ibid.) と語る。では、具体的にカントは、いかなる哲学を表明したのだろうか。

カントは、認識射程について、私たちの感覚や理性の世界を超えて存在するという事物の根源が、私たちの認識能力にとって到達不可能であると考えた。そのことから、彼はこう結論づけている。「私たちの学問的な努力は、経験によって到達可能な範囲でおこなわれなければならないし、《物自体 : Ding an sich》という超感覚的な根源の認識に到達することはできない」 (ibid.)、と。

つまり、カントは、私たちの感覚や理性の世界を超えて存在するという事物の根源《物自体》が、私たちの認識能力にとって到達不可能である、と結論づけるのである。私たちの学問的な努力は、「経験」によって到達可能な範囲でおこなわれなければならないし、《物自体》という超経験 (超感覚) 的な根源の認識に到達することはできない、とされる。ここに、私たちの認識や経験が

機能する現象界と、私たちの認識や経験の及ばない《物自体》・自由・魂の不滅・神・道徳が位置づく叡智界とを分断するカント的二元論が成立するのである。では、この二元論を分割・形成する「経験的（ア・ポステリオリ）」と「超経験・先験的（ア・プリオリ）」の概念をシュタイナーの記述に沿って解説してみよう。

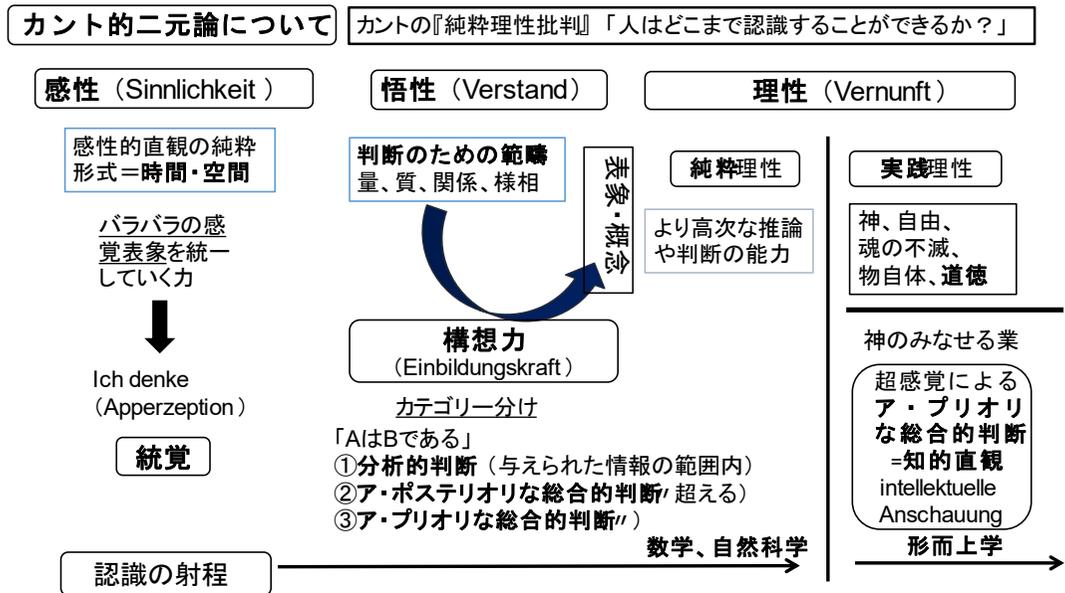
『純粋理性批判（*Kritik der reinen Vernunft*）』（1781）の緒言Ⅱ（*Einleitung Ⅱ*, S.47-S.48）において、「経験」はカントによってつぎのように語られている。「たしかに経験は、何かあるものがしかじかの性質をもったものであるということを、私たちに教えはする。しかし、そのものが『それ以外ではあり得ない』ということ〔必然〕を教えるものではない」。また、「経験は、その判断に真実の、あるいは厳密な普遍性をけっして与えるものではない。ただ（帰納によって）仮定された（比較上）相対的な普遍性を与えるだけである」、と。さらに、『プロレゴメナ（*Prolegomena*）』（1783）の第一節「形而上学の起源について（*Von den Quellen der Metaphysik*）」にも、つぎの言葉を見い出す。「まず、形而上学の認識の起源に関して言えば、そうした根源的な認識は経験的ではあり得ない、ということがすでにその概念の内に含まれている。それゆえ、形而上学的な認識の原理（単にその原理だけでなく、基本概念もまたそこに属す）は、けっして経験から獲得されるべきものではない。なぜなら、その原理は、物質的（フィズィック）ではなく、物質を超えた（メターフィズィック）、つまり経験の彼方にある認識であるべきだからである」（Steiner, 1892, S.32）。

さらに、経験的認識の射程について、カントは、『純粋理性批判』（S.58）においてつぎのように補足する。「何よりもはじめにつぎのことに気づかなければならない。つまり、真の形而上学的な諸命題は、つねにア・プリオリな判断であり、経験的でない。なぜならば、それらは、経験から推し量られない必然

性をもちあわせているからである。しかし、それでも、人がこのことを認めないとしたら、私は自らの命題を純粋数学に制限するつもりである。その純粋数学の概念とは、純粋数学が経験的な認識ではなく、たんにア・プリオリな純粋認識だけを含んでいるということを示すに必然的なものとする概念である」。

カントは、こうした経験を超えた必然性と厳密な普遍性をもつ領域として、ここで挙げた純粋数学と純粋自然科学をア・プリオリな学問として容認するのである。

以下、上記のカント的認識論をふまえて、「人はどこまで認識することができるのか」というカント的認識の射程を図にまとめてみた。



では、このカント的認識論を含むドイツ観念論に対し、シュタイナーはどこに問題を見、それをどのように克服すべきだと論じるのだろうか。

2. シュタイナー認識論におけるカント的認識論批判の視座

本項では、シュタイナーによるカント的認識論克服の視点を中心に記述してみたい。加えて、同じくカント思想の克服を目指したドイツ観念論者のフォルケルトやJ.G.フィヒテに対する、シュタイナーによる共感と批判の論点を挙げることを通して、シュタイナー認識論の独自の観点を浮き彫りにしたい。

まず、それらの解説に先立ち、シュタイナーが学問研究において認識論をいかに位置づけているのかについて確認しておきたい。

認識論とは、あらゆる諸学が、吟味の可否は別として、学問研究の前提を置いているものといえる。それゆえ、認識論には、哲学上の根本学

(Fundamental Wissenschaft) としての位置づけが与えられる。というのも、私たちは、認識論を通してはじめて、他の諸学によって獲得された洞察がいかなる価値と意味をもつのかを知ることができるからである。認識論は、この点について、あらゆる学問的な努力の基礎を形成するものといえる。

こうした重要な位置づけを有するにもかかわらず、広く知られた認識論の体系を綿密に検討する際、人は、すでに研究の出発点においてたくさんの前提が作られているという事実を見い出す。しかし、もし、学問の問題提起の時点でし損じられるならば、まったく、はじめから、正しい解決に疑念を抱かざるを得ない。

シュタイナーもまた、こうした認識論の課題や意義を深く認め、認識問題の定式化を成し遂げようと努める。そのシュタイナーによる認識問題の定式化とは、認識論の特性を、「完全に前提のない学問」として、厳密に正当に評価することにあつた。

では、以下、シュタイナーが克服の対象とするカント的認識論がこの「完全に前提のない学問」にどう位置づけられるのかを軸に、シュタイナーが展開する持論を見てみよう。

まず、シュタイナーは自らの認識論著作において、カント的認識論が有する認識前提に注目する。シュタイナーは、とりわけ、その認識前提に、カントが設定する「経験的なもの」と「経験を超えたもの」の二元的区分を見、問題視する。カントが人間の認識を超えて叡智界に置く《物自体》について、シュタイナーはこう疑念を示す。「もし、この《物自体》が事物の彼岸の根源ともどもたんなる幻影だとしたら、どうだろう！カントの言う物（Sache）がそのようなケースにあたることは容易に洞察できる。事物の深い本質、つまり事物の根源原理を探求することは、人間本性と分かちがたい衝動である。それは、あらゆる学問的な取り組み（Treiben）の根拠となっている」（Steiner,1892, S9）、と。

シュタイナーにとって、事物の深い本質、つまり事物の根源原理を探求することは、人間本性と分かちがたい衝動であり、この根源を、私たちに与えられている感覚的・精神的な世界の外に求める根拠はいささかもない、と考えられたのである。そして、この人間の根源的な認識衝動を吟味することなく設定された《物自体》や現象界と叡智界の分断を、シュタイナーは問い正すのである。

つぎに、シュタイナーによるカントへの異議として提示される、経験をめぐる二つの議論を見てみよう。カントの「経験」理解は、D.ヒューム（David Hume：1711～1776）の影響を一部受け、独自に形成されるが、そこでの経験的判断と先験的判断の在り方に対し、シュタイナーは偏りのある前提を見い出す。

つまり、カントが認識論上の根本問題として、「ア・プリオリ（先験的）な総合的判断（人間における最も崇高な認識形式）」がいかに可能であるか、と設定する点がそれに当たる。「経験以外に、認識に到達するもうひとつの方法をもたねばならない」とするこのカントの見方に、シュタイナーは第一の異議を見い出すのである。シュタイナーは、この問い立てが、はたして、カントが

規定するように、あらゆる前提のないものであろうかと疑念を投げかける。シュタイナーは、そこには前提が置かれていると判断する。というのは、絶対的で確実な知識の体系が、総合的判断やあらゆる経験から独立した判断に基づいてのみ築かれる、という先入観がそこに見られるからである。そして、この見方に沿って、カントはつぎのような判断を「総合的判断」と呼ぶことになる。つまり、その判断に際して、述語の概念がまったく主語の概念からかけ離れてみえるようなものを主語の概念へと結びつけるような判断を「総合的判断」と称するのである。それに対して、「分析的判断」において述語は、単に隠れた仕方、すでに主語のうちに含まれている何かを語るだけである。よって、この「分析的判断」と区別された「総合的判断」とは、付け加える概念の内容を、最初の概念のうちにまだ含んでいない（少なくとも私たちにとってそう思われる）ような拡張的な判断をさすことになる。

この「総合的判断」は、先の図に示したように、カントの場合、「ア・ポステリオリな総合的判断」と「ア・プリオリな総合的判断」に分類され、前者は経験論的にその確からしさを確保できるが、後者は経験を越えて必然性と厳密性をもつ判断と解された。こうしたカントによる「あらゆる経験的知識は条件付きの妥当性のみをもち得る」という前者の見方に対して、シュタイナーは異議（第二の異議）を唱えるのである。

しかも、この後者の判断に関しても、シュタイナーは、ア・プリオリに、すなわちあらゆる経験から独立して獲得されねばならないと要求する、という理解は間違った設定である、と指摘する。それどころか、そのような判断などそもそもどこにもまったく存在しないと考える。つまり、彼は、認識論を創築する際、私たちが、経験とは別の仕方によって判断に到達し得るのか、あるいは経験によってのみ判断に至り得るのか、という事前の取り決めはまったく必要なく、実際的にも、「経験から独立した判断」は不可能である、とみなすので

ある。なぜならば、私たちの知識の対象がなんであろうと、それは、まぎれもなく、直接的で個人的な体験（*Erlebnis*）として私たちに迫ってくる、つまり、経験（*Erfahrung*）となるにちがいないからである

（Steiner,1892,S.30）。カントが特別視した数学的な判断ですら、私たちは、特定な個別のケースにおいて経験するやり方で手に入れるのだ、

（Steiner,1892,S.30）、とシュタイナーは主張するのである。

以上が、認識論研究のはじめにいかなる絶対的で有効な認識も経験に由来し得ないと断定すべきでない、というシュタイナーによるカントに対する第二の異議である。

これまで考察してきたように、シュタイナーは、上で見た二つの前提が、カントにおける認識論の前提に含まれていることを問題視する。すなわち、ひとつは、私たちが経験以外に、認識に到達するもうひとつの方法をもたねばならないということ、そして、いまひとつは、あらゆる経験的知識は条件付きの妥当性のみをもち得るということである。カントは、自らが前提に置くこれらの命題が検討を必要としているということや、疑われ得るということに、まったく思い至らなかった。それゆえ、シュタイナーは、ドグマ的な前提を有する「カント学説の建造物は、まったく砂上の楼閣である（あらゆる基礎が欠けていることになる）」（Steiner,1892.S.32）と主張するのである。

3. シュタイナー認識論におけるドイツ観念論克服の視座

ここでは、シュタイナーがカント的認識論を克服するひとつの見方とするフォルケルトとフィヒテの理論を取り上げてみたい。

まず、フォルケルトの立場を紹介しよう。彼は、カントの認識論について、「かのドグマ的な前提（普遍的な知識はア・プリオリなものであるという前提）」によってまったくき制約を受ける（Volkert, *Erfahrung und Denken*,

S.21)、と批判する。この記述から、シュタイナーは、フォルケルトもまた、カントの『純粋理性批判』がいかなる前提ももたない認識論とは言えない、と判断していることに共感を示す。シュタイナーは、あらゆる認識論は、読者を、まず初めに、いかなる前提も置かないスターティングポイントへ導かねばならない(Steiner,1892,S.35)、と語る。

シュタイナーは、この「認識前提を置かない」見方に立ち、自らの認識論の立場を以下のように表明する。その第一の視点は、認識と自己との関係である。シュタイナーは外的な事物に対する認識についてつぎのように考えている(Steiner,1892,S.57)。

私たちは諸事物をせいぜい外的に存在するものとして記述することはできるが、決してそれらを把握することはできない。私たちが記述できる概念は、各連関における純粋に外的な関係にすぎず、内的なものではない。しかし、その外的な対象は、私たちの感覚に与えられたものにもなり得るし、非一所与を自指す最も内的な本性 (das seiner innersten Natur nach Nicht-Gegebene) ともなり得る。それゆえ、本来の認識は、外的な対象における事実記述に留まるものではなく、私にとって、現象の意味や世界の本質を開示してくれる。それは外ではなく、「自己」に属するものであるし、自己から始まるものである、と。

このことから、シュタイナーが、カントの場合のように、経験的認識を、事実の記述に限定するのではなく、現象の本質理解に拡張し得ると考えていることが分かる。しかも、その認識論は、認識能力が到達できないものを記述しようとするのではなく、むしろ、自己の認識能力が実際に何を達成することができるのかを示すことを目的としているものと思われる。

では、シュタイナーは、そうした事実の分析・記述と別に設定される、自己を通した認識の課題を何に見、そこで見いだされる真理をいかなる性質ものと

考えたのだろうか。

シュタイナーによれば、真理とは、ふつう、私たちが捉えるように、何かある現実の観念的な反映ではなく、「人間精神の自由がもたらした産物 (ein freies Erzeugnis des Menschengeistes)」であり、それは、もし、私たちが自ら生み出さなければ、まったくどこにも存在しない類いのものである (Steiner, 1892, S.11)、と言う。それゆえ、認識の課題は、何かすでに別のところに存在するものを概念的な形式に焼き直す (*wiederholen*) ことではなく、むしろまったく新しい領域を創造する (*schaffen*) ことにあるとされた (ibid.)。そして、その新たに創造された領域が、私たちの感覚に与えられた世界と結びつくときはじめて完全な現実を明らかにすると考えられた。この意味で、私たち人間は、世界過程に能動的にかかわる共同の創造者という位置づけがなされるのである。

では、シュタイナーの説く「自己を通した認識」は、具体的にどういった点で、カント的認識と異なった認識過程をたどるのだろうか。カント的な認識の思考過程では認識主観の限界が設定され、私たちは世界の本質 (叡智界) にアクセスすることはできない。しかし、シュタイナーによる認識主観は、つねに本質認識に向けたプロセスに位置づき、変容・拡張する可能性を秘めている。このことをシュタイナーは、つぎのように語る (Steiner, 1892, S.9)。

認識活動をする際、その中に立ち現れてくるとする主観の形式、つまり、私の表象は、避けようのない通過の段階にすぎない。しかし、その段階は、その認識過程そのものにおいて克服されるものである、と。

それゆえ、カント派が世界認識に際し、その主観性ゆえ限界を設定する経験という概念は、シュタイナーにとって、認識主観がもつ変容と拡張的な性質ゆえ、客観的領域に進むことが可能とされる。そして、こうした物の見方に基づき、シュタイナーは、制約を有するカント的主観主義の克服として、自己内観

による拡張的な認識論として「客観的観念論（der objektive Idealismus）」(ibid.)を提示することになる。この立場は、自己自身を理解しようとする（「汝自身を知れ」の立場に立つ）認識論の必然的な帰結として基礎づけられるのである。

さらに、シュタイナーは、自らが主張する「客観的観念論」は、ヘーゲル的な形而上学的観念論、つまり絶対的観念論ともつぎの点で区別されると言う(Steiner,1892,S.16)。すなわち、シュタイナーの説く客観的観念論は、認識主観のうちに所与の存在と形成する概念との分裂の根拠を追求する点と、それらの分裂の調停を、客観的な世界弁証法においてではなく、主観的な認識過程において進める点である。

では、つぎにフィヒテの知識学に議論を移そう。

ここまでシュタイナーによる認識論の特徴を、カントやその他のドイツ観念論者の見解を踏まえ描出してきた。それによれば、その特徴として、「前提のない認識論」「真理把握に向けた経験の深化と拡張（経験に制約・限界を設けない）」「主観的認識の不完全さと自己意識を介した具体性の実現」「普遍に向けた認識主観の変容・創造的向上」「とらわれのない内観的アプローチ」「特殊（個）と普遍（全体）の一元的即応」などの観点が挙げられる。

以上のシュタイナー認識論の特徴をふまえ、シュタイナーがドイツ観念論において最も共感を示すフィヒテの認識論（知識学Wissenschaftslehre）との相違点に言及してみたい。

この議論で注目する概念は自我である。私たちは何かを外的にあるいは内的に知覚するとき、その意識の中心に自我が存在していると考え。そして、その意識を介して理念が表出する。シュタイナーは、自我が直接に与えられているものを通して、それが与えた以上のものを見いだすよう駆り立てられると考えている。そして、自らのとらわれのない思考によって色づけされた理念に至

り、その純度が高まる程度に応じて、意識は自己自身を「現実的な意識」として実現していくと考えられた(Steiner,1892,S.72)。

フィヒテもまた、自我がそのあらゆる能動性を発揮することができるのは、最も高次の意志の段階である絶対的な決意によってだけであるにとらえている。それゆえ、フィヒテはカントの流れをくむ思想家のうちで、あらゆる学問の基礎が意識論のもとで最も生き生きと描き得ると考えた哲学者であると、シュタイナーは評価する。

しかし、シュタイナーは、そのフィヒテに対し、自我によって絶対的に定立された能動性に自我自身が行為の内容を獲得できるよう力を貸すということができていない(Steiner,1892.S74)、と指摘する。そして、自我の絶対的な事行から自我のさらなる限定へ何とかして進もうとする彼の努力は徒労に終わった (ibid.)、と結論づけるのである。

実際、フィヒテは自らが描く批判的観念論において、自我の進行をつぎのよう

に説明している(Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre. Stämrtl. Werke I, S.178. Steiner,1892.S.74-S.75)。

これについての探求は理論の限界外にあることを示している。批判的観念論は表象の説明において、自我の絶対的能動性から出発するのでもなければ、非我の絶対的能動性から出発するのでもなく、むしろ同時に限定作用でもあるところの限定態から出発する。なぜなら、意識の中にはそれ以外のものは何も直接には含まれていないのであり、また含まれることはできないからである。この限定をさらに限定するものが何であるかは、理論においてはまったく未決定のままである。そして、この不完全性によってわれわれは、理論を超えて知識学の実践的部門へと駆り立てられるのである。

しかし、シュタイナーの立場からすると、フィヒテがこのように理論と実践

を分断し、実践を知識学の一部門に押し込むことは、認識を介した知行的総合の力を無効にしてしまうことを意味した。なぜなら、シュタイナーが描く「前提を置かない特殊と普遍の即応的一元論に立つ認識論」は、自我意識の自由な行為（知行合一）によってのみ実現され得るものと考えからである。それゆえ、自我が認識を遂行（認識の理念を実現）する際、まさに行為へと刻まれる「自我の決意」が重要となるのである。たしかに、「自我がその自由な決意によって他の多くの事柄を成し遂げることができる」という表現は、既述したようにヘーゲルの言にも見出せるが、この場合、重要なのは、「自由な」自我の特徴ではなくて、むしろ「認識（思考）する」自我の特徴なのである（Steiner,1892.S.75）。このことをシュタイナーは重ねて強調するのである。

以上の観点から、シュタイナーは、フィヒテ思想に、自我固執から生まれる理論の飛躍を見るのである。具体的には、飛躍とはつぎの①の方法から②の方法への移行を意味する。つまり、シュタイナーによれば、それは、①意識を何らかの経験的な能動性のもとで取り扱い、根源的に意識から生じてくるものではないすべてのものを徐々に剥ぎ取ることによって自我の純粹概念を取り出すという方法から、②自我の根源的な能動性のもとで始まり、自己自身について熟考し自己自身を観察することで自我の本性を自我自身が示そうとする方法への飛躍的な移行であるとされる（Steiner,1892.S.S.76-S.77）。フィヒテは、自らの哲学的思考を開始する際に第一の方法をとったが、第一の方法を遂行するうちに第二の方法へと移行していった、とシュタイナーは見るのである。

つまり、フィヒテは、①意識を経験に照らし、根源的なもの以外をはぎ取り純粹自我を見いだすことから、②自己自身を観察し自我の本性を見いだすことへと方向転換したのである。1797年の『知識学への第一序論』（*Ersten Einleitung in die Wissenschaftslehre*）において、フィヒテは自己観察を自我に固有の根源的特徴を認識するための正しい方法として薦めている。それ

が広く知られるつぎのフィヒテの言葉となる。

君自身に注意を向けなさい。君の目を、君を取り囲むすべてのものから転じて、君の内部に向けなさい。これが、哲学の初心者に対して、哲学が最初に要求することである。問題となるのは、君の外部にあるものではなく、もっぱら君自身である。

(Fichte, J.G., *Erste Einleitung in die Wissenschaftslehre*,
Stuttgart, 1797, S.186)

ここでは、自己観察の方法は、思考ではなく、あらゆる方面へと展開している自我の働きのうちに限定される。

シュタイナーは、このフィヒテのように、「自我は、思考形式をもって与えられたものに歩み寄る場合にのみ、現実性をもつすべての内容に到達する」ということを知らない人にとっては、認識プロセスは自我から恣意的に世界を紡ぎ出すこと（*Herausspinnen*）として現れると述べ、フィヒテの自我論の飛躍を指摘するのである（Steiner, 1892, SS.80）。

フィヒテの深い内観的アプローチに共感を示すシュタイナーは、フィヒテが自我の能動性を限定する（思考）の働きに気づき、自我は認識を定立するという出発点を理解できたならば、認識論の真の出発点に到達していたであろう（Steiner, 1892, S.79）、と主張する。しかし、フィヒテはこの点を明らかにしなかったため、彼は単純に存在の定立を自我の能動性の特徴として定め、その結果、自我の絶対的能動性をも制限することになってしまったとされる。なぜなら、フィヒテの自我論では、自我の「存在定立」のみが無制約的であり、自我から出発するところの他のすべてのものは制約されることになるからである。

以上のように、シュタイナーによれば、フィヒテの問題点は自我と思考との関係を適切にとらえることができなかつた点にあるとされる。シュタイナーは、与えられた世界をたんに知ること（*Kennen*）とその世界の本質を認識す

ること (*Erkennen*) とは異なる(Steiner,1892,S.85)、と考えた。世界の本質は、与えられたものと思ふそのものによって私たちが構築しなければ、私たちに明らかにはならない。与えられたものが本来的に「何」であるのか(存在の定立)は、フィヒテも言うように、自我にとってはただ自我そのものによってのみ明らかになる。だが、自我は与えられたものの世界内容の本質を自己のうちに定立することはできない、とシュタイナーは考える。世界の本质認識は、自我そのものの働きではなく、自我を通して、思考において完遂されるのである。まさに、そうした自我を介した、とらわれのない思考によって作り上げる最後の形態こそが、現実性の真なる認識形態とされる。つまり、自らの思考が関与する純粹理念に至って初めて意識は自己自身を実現するため、「現実的な意識」(Steiner,1892,S.72)となるのである。

以上の考察をふまえて、シュタイナーは、独断論 (*Dogmatismus*) はその《物自体》を、主観的観念論 (*der subjective Idealismus*) はその《自我》を根源的原理とする立場を放棄しなければならない(Steiner,1892,S.87)、と主張するのである。なぜなら、解説してきたように、これらはその相互関係に従って本質的には思考において規定されるものだからである。

The theory of self-awareness underlying Steiner education

Yoshinori ETO

(Professor, Hiroshima University)

Know yourself (γνῶθι σεαυτόν : gnothi seauton) .

This word, as is well known, refers to one of the proverbs dedicated to the temple of Delphi by Ancient Greek philosophers. From these words, we can receive the message, “If you want to know the true nature of things, first, look inside your own heart, watch with the mind's eye, and think.”

This paper focuses on Rudolf Steiner's work, “*Truth and Science: Prelude to a Philosophy of Freedom*” (“*Wahrheit und Wissenschaft: Vorspiel einer Philosophie der Freiheit*”, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, 1892), making self-introspection an important practical issue in cognition, and aims to clarify the thought structure of the epistemology.

Specifically, how Steiner faced the Kantian dualism of cognition and existence that was dominant at the time, how he overcame it, and how he developed his own original expression was revealed.

It was thought that complete reality would be revealed only when this newly created realm was connected to the world given to our senses. Steiner thinks that it is an inseparable impulse for human

nature to explore the deep essence of things, and as Kant says, that there is no basis for seeking this origin outside of the sensory and spiritual world given to us. In other words, Steiner questioned the view of things-in-themselves, and divisions such as the phenomenal world and the noumenal world, the particular and the universal, the subjective and the objective, the individual and the holism, the experience and things beyond experience.

Based on this, he proposes a theory of creative subject transformation that centers on the ego and thinking. He believes that complete reality would only be revealed when this newly created realm is combined with our senses. In this sense, we human beings are positioned as co-creators who are actively involved in the world.